

第1回 文化を培うこれからの国土交通行政を考える懇談会

平成18年11月20日（月）

【座長】 20世紀の大量生産、大量消費の文化の中で、地球環境問題が起きて、地球のエコシステムが壊れかかっている。そういう中で、大量生産、大量消費の文明を克服するためのキーワードとして、脱物質化がある。脱物質ということを言い直すと、精神文明ということ。まさに精神文明を支えるのが文化であると認識している。

さて、きょうは第1回なので、各委員に自由にご発言いただきたい。

【委員】 日本だと、例えばバブルのときには、お金があるのでどんどん文化政策の予算が付いたが、いざバブルがはじけると、まず最初にそこをカットしていった。経済がよければ文化にお金を出すのではなく、文化が経済を支えるという点をまず基本にして進めていただきたい。

【委員】 残念ながら急逝された、故木村尚三郎先生が、もし生きて、こちらの席にいらっしやったら、こういう国土交通省が文化というものを国土行政の視点にとらえるということに関して、「戦後日本の50年、日本文明というのはちゃんとできただろうか。これから新しい試みで、新しい日本文明というのができるかもしれない」と、そう言われたのではないかと思い、この懇談会の成果がきっかけとなり、新しいパラダイムに行ければなどというふうに考えた。

また、ニューカルチャーについて、若者が今どんなことを思って、どんな文化をつくらうとしているとか、案外それが世界、アジアにおいて、こんなところが非常に文化的にアピールしている中でどういう文化が生まれてくるんだろうかというあたりも、今回議論の幅の中に入れて、次回、次々回、資料及び発言をさせていただきたい

【委員】 世界から見て日本の魅力とは何か、文化的なイメージはするが、現実にはまず東京に来て、その文化的側面から何を感じるかどうかということが一番大切。

ファッションという面から見たらどうかというと、例えばフランスの場合は、ファッション、モードなくして、ある意味でパリの文化は語れない。観光としても世界一だと思う。日本も観光立国として目指すためには、ファッションを産業に持っていくことではなくて、ファッションという一つの文化意識や生活の美意識、そういうものが日本人にないのだと思う。

教育に関係あるが、子供たちが美術館なんかに行くチャンスがあまりないように思う。ふだんから子供たちが芸術や美術に対して違和感なくずっと育っていれば、大きくなって、10年、20年、30年、未来的だと思う。そういうこともいろいろ含めて、文化は大変大きいもの。

【委員】 いわゆる景勝景観と言われるようなビューポイントだけを整理して、きれいにしていくということだけではなくて、やはり人生や生活の中におけるアートというか芸術を単に、ショーウインドーの中や、美術館の中にだけ芸術を置くのではなく、毎日の通勤時であるとか、通学時であるとか、ちょっとパンを買いに行くとか、そういう生活の中の一つ一つの風景や日々の営みの中にアートであるとか文化、芸術というものが、もっともっと楽しめていい。それがほんとうの意味での人生の豊さではないか。

結構日本に長くいる外国の方が日本の文化をうまく取り入れながら、非常に機能的に、かつ、こんな使い方があったのか、こんな利用の仕方があったのかと思うほどうまくデザインして見せてくれたり、あるいは建物を建ててみせてくれたりする例が非常に多い。ぜひ、そういう方々の目も生かしてみてもどうか。

また、京都では京町屋を、表のファサードは町屋のままだが、内部をフランス料理の店だとか、イタリアの店だとか、日本的なものと近代的な洋風生活をうまく兼ねあわせているものもたくさん出てきているので、古いものを単に守るというだけではなくて、うまく生活の中で心地よく利用していくというような、仕掛けができてくるといいと思う。

【座長】 日常生活の中の文化は非常に大事。あまり特別なものじゃなくて、生活の中の文化という視点は、ご指摘のように非常に大事だと思う。

【委員】 大事なのは、各都市の人たちが、自分の街を誇りに思っていること。それには教育というか、自分の街の歴史を小さいときから知ることが大事。金沢では、金沢検定とジュニア金沢検定をやっているが、そういう特別な免許を与えると皆さん一生懸命、街の歴史とかそういうものを勉強していただけるのではないかな。

また、景観の話になるが、姫路城ほど立派な、本物のお城が、新幹線からどんどん見えなくなっていく。やはり日本の条例による規制というのかな、そういうものが必要なのではないかな。ああいうのはすごく悲しいと思う。街のシンボルなのに。沿線から今まで見えていたそういうものを探るのがほんとうに大変になった。これもやはりどこか街の行政のひずみか、そういうものに対してあまり考えていないからなのではないかな。

【座長】 地元の人たちの支援がなかったら、そもそもこれは進まない話で、子供の教育

の話も非常に大事。

景観条例が昨年できたが、あれはやはり日本の国民の中で、そういう問題に対する意識が高まったからできたと思う。だから、教育とか情報発信というのは一番根底にある、一つの問題だと思う。

【委員】 日本は山国なので、山の眺めをうまく使って、例えば全体の町のスカイラインを押さえていくとか、ある重要な地点からの眺望を守っていくというのが、これから非常に重要になってくると思う。その場所の公共性もあるので、どこから見る、何が大事なのか、それを守るためにはこういう規制がないといけないというようなことをうまくやっていくと、町全体の姿形を整える方向に行くのではないかな。全国共通して取り組むことができるのではないかなと思うのが1点。

もう1点は、歴史文化を生かしたまちづくりの事例の中には、行くといいが、島状になっていて、そこはいいが、そこまで行くところが全然関係なくて、行ってみればそうになっているものもある。全体の仕組みとしてはまずいんじゃないか。そこがどういうふうにあるべきかをすぐに国のレベルで何かつくっていくというのは非常に難しいが、少なくとも今まで出ているように、醜いものを削っていくというのはできるんじゃないか。醜いものの排除のための公共の論理の仕組みが必要。

それから3点目は文化的魅力のとらえ方は世代によってやはりちょっと違うんで、まとめ方も少し注意しないといけないかなという気がする。ミドル世代は非常にハイカルチャー的なところが魅力的な空間であると。つまり銀座のようなところ。ハナコ世代というのは、家族とか、みんなでバーベキューができるところ。ほっとする空間が魅力的だと感じるらしい。そして、若い世代は何もない、人と接触がなくて何もないところが魅力的だと感じるというように世代により全然違う。

【座長】 今の景観の問題というのは、日本の私有財産というか、私権の制限とかかわるところがあってなかなか難しいところ。

日本の場合、非常に自由な民主主義のもとで、私権は伸ばし放題、無制限に認めてきた結果、今の醜い景観が随分出てきたという側面がある。多分、去年の景観法の発足はそういうことを国民の間に十分に認識が通って、みんなで私権も制限しなきゃいかん時代が来ていると、そういう合意に達したんじゃないかなと感じている。

【委員】 例えば京都は、古来、中国の長安をまねて、いわゆる風水でまちづくりをもともと始めているが、地形と川との関係とか、地形と川との関係の中で道をどういうふうに、

大路、小路を築いていくかと、昔の人は、地勢学的にいろいろ考えて、そして快適に過ごせる空間をつくっていたと思う。近代の我々は、どうしてもそういう風の音を聞いたり、さわったり、意識したりということが少ない形でどんどんまちづくりを、経済的合理性の中でやってきている。地勢学的な自然というものを、空気の流れというものをベースに調査してみる必要があるのではないか。それでもう一度、まちづくりをやるときの線引きとか、道路のつけ方であるとか、住宅の用途地域をどうするか、高さ制限をどうする、容積をどうするというときにも、そういう要素を入れてみてはどうか。

【座長】 環境問題と文化問題というのは、かなりの部分で裏表の部分があると思う。この辺できょうの討論を終わらせたい。大変貴重なご意見をありがとうございました。

— 了 —